

京極派和歌の一面覚書(二)

—〈間〉の歌の考察—

中 川 博 夫

はじめに

いわゆる京極派和歌の特質、他と異なる存在意義は、その自然詠あるいは叙景歌に多くを負っていることは大方の認めるところであろう。問題は、それを如何に具体的に検証して表現の本質を見極め、和歌史上に位置付けるかにある。

前稿^{〔1〕}では、素材としての〈軒〉を取り上げてその問題を考察した。小稿はその延長で、〈間〉の歌、それも主に叙景歌で空間上の隙間の意の「間」を詠んだ歌について、調査と整理を報告しつつ、京極派和歌の表現の特質の一面について検討を加えてみたい。

一

左の表は、「ま」「ひま」「いとま」の詞に表される「間」を含む歌の数の一覧である。

*便宜上、例えば「たえまなし」「ひまなく」「いとまなみ」といった、「間」が「無し」という類の表現の場合も含む。

各段の総数の右の「時間」の項は、その「ま」なら「ま」が時間上の「あいだ」の意味の場合の数、つまり例えば、「空蟬の世にもにたるか花ざくらさくと見しまにかつちりにけり」(古今集・春下・七三・読人不知)のように、時の合間の意味で用いられている「間」を含んだ歌の数である。この時間上の「間」は、勿論叙景歌に重要な働きを示す場合もあるが、補正を期して小稿では考察の対象からはずす。

同様に「空間」の項は、「ま」などが空間上の「あいだ」の意味の場合の数、例えば、「このまよりもりくる月の影見れば心づくしの秋はきにけり」(古今集・秋上・一八四・読人不知)のように、隙間の意味で用いられている「間」(〈間〉)を含んだ歌の数である。この類の歌(今仮にこれらを総称して「〈間〉の歌」とする)について、その具体相を考察したいと思うのである。

その右は内数で、空間上の「間」の歌の内、その「間」を含む措辞が、何らかの比喩表現や序詞・懸詞として機能していて、純粹に景物・自然の直叙とはなっていない場合の数である。

	総数	時間	空間	懸詞 等	序詞 内等	見立 等	
古今集 (1100) = 総歌数	30 1 0	24 0	6 1	3 (0, 0	3, 0	0)	ま ひま いとま
後撰集 (1425)	34 0 1	24 1	10 0	7 (6, 0	1, 0	0)	
拾遺集 (1351)	27 0 2	16 2	11 0	6 (3, 0	3, 0	0)	
後拾遺集 (1218)	33 5 0	16 1	17 4	6 (1, 2 (2,	5, 0,	0) 0)	
金葉集 (665)	23 4 0	7 1	16 3	9 (3, 2 (1,	6, 1,	0) 0)	
詞花集 (415)	14 1 0	6 1	8 0	3 (0, 0	3, 0	0)	
千載集 (1288)	33 8 0	14 4	19 4	7 (1, 1 (0,	4, 1,	2) 0)	
新古今集 (1978)	69 6 4	36 1 4	33 5 0	8 (2, 4 (1,	5, 3,	1) 0)	

	総数	時間	空間	懸詞 等	序詞 内等	見立 等	
新勅撰集 (1374) = 総歌数	44 6 2	21 5 2	23 1 0	11 (0, 0	11, 0	0)	ま ひま いとま
続後撰集 (1371)	30 2 1	16 1 1	14 1 0	9 (0, 1 (0,	9, 1,	0) 0)	
続古今集 (1915)	46 7 1	26 6 1	20 2 0	5 (0, 1 (1,	5, 0,	0) 0)	
続拾遺集 (1459)	52 6 1	29 5 1	23 1 0	8 (1, 0	5, 0	2)	
新後撰集 (1607)	49 10 0	27 7	22 3	5 (3, 0	2, 0	0)	
玉葉集 (2800)	88 14 2	41 6 2	47 8 0	6 (0, 4 (1,	5, 3,	1) 0)	
続千載集 (2143)	65 12 0	37 6	28 6	12 (1, 1 (1,	10, 0,	1) 0)	
続後拾遺集 (1353)	39 5 0	24 5	15 0	6 (1, 0	5, 0	0)	

	総数	時間	空間	懸詞 等	序詞 内等	見立 等	
風雅集 (2211) = 総歌数	83 13 0	39 6	44 7	5 0	(0, 4,	1)	ま ひま いとま
新千載集 (2365)	62 11 3	23 7 3	39 4 0	10 1	(1, 0,	8, 1, 0)	
新拾遺集 (1920)	65 14 1	35 12 1	30 2 0	14 1	(2, 1,	12, 0, 0)	
新後拾遺集 (1554)	55 9 0	24 4	31 5	8 2	(0, 0,	6, 2, 0)	
新統古今集 (2144)	70 13 0	45 8	25 5	4 1	(3, 1, 0)	0)	
新葉集 (1426)	46 12 1	19 8 1	27 4 0	9 0	(1, 8,	0)	
万葉集 (4540)	83 2 10	55 2 10	28 0 0	13	(2, 11,	0)	
堀河百首 (1601)	64 20 0	26 10	38 10	9 1	(0, 0,	2, 7) 0, 1)	

	総数	時間	空間	懸詞 等	序詞 内等	見立 等	
久安百首 (1401) = 総歌数	48 12 1	29 5 1	19 7 0	3 0	(0, 2,	1)	ま ひま いとま
正治初度百首 (2301)	70 12 0	29 5	41 7	2 0	(1, 1,	0)	
山家集 (1552)	32 10 0	12 4	20 6	5 1	(0, 0,	4, 1, 0)	
長秋詠藻 (652)	11 2 0	4 2	7 0	1	(0, 1,	0)	
拾玉集 (5803)	96 18 0	41 7	55 11	13 3	(0, 2,	12, 1, 0)	
秋篠月清集 (1611)	49 7 3	9 3 3	40 4 0	6 0	(1, 5,	0)	
壬二集 (3201)	90 13 3	42 5 3	48 8 0	7 3	(0, 1,	7, 2, 0)	
拾遺愚草 (2985)	86 10 0	42 7	44 3	6 1	(0, 1,	5, 0, 0)	

	総数	時間	空間	懸詞等	序詞内等	見立等	
為兼全歌集 （『京極派和歌の研究』所収） （827）＝総歌数	18 3 0	9 2	9 1	2 0	（0, 2,	0）	ま ひ ま い と ま
伏見院御集（2373）	77 3 6	48 1 6	29 2 0	1 0	（0, 1,	0）	
永福門院百番自歌合（200）	10 1 0	3 0	7 1	0 0			
花園院御集（光厳院）（165）	2 0 0	2	0				
伊勢物語（242）	6 1 1	3 1 1	3 0 0	3 0 0	（0, 3,	0）	
源氏物語（795）	25 2 0	16 1	9 1	9 1	（0, 9,	0） （0, 1,	0） 0）
狭衣物語（216）	7 4 0	4 1	3 3	3 3	（0, 3,	0） （2, 1,	0） 0）

* 「間近（し）」「間遠（し）」「まがき」「ませ」等は除く

丸括弧内は、さらにその内数で、「懸詞等」の項は、例えば、「今のみとたのむなれども白雲のたえまはいつかあらんとすらん」（後撰集・恋一・五三六・読人不知）のように、「たえま」が、恋人の逢瀬の中断や、人の死の喩え（拾遺集・五七四）や、また序詞の中で「岩間」と「言はまほし」の懸詞（後撰集・五九〇）であったりして、空間上の意味の「間」を含む詞が、一首の表ではそれ以外の意味で働いている場合である。

次の「序詞内等」の項は、例えば、「かすがののゆきまをわけておひいでくる草のはつかに見えしきみはも」（古今集・恋一・四七八・忠岑）のように、空間上の「間」を含む詞自体は比喩や懸詞ではなくとも、その詞を含む叙景句が、一首の中で序詞や比喩表現となっている場合である。

また、「見立等」の項は、例えば、「五月やみさやまの嶺にとともす火は雲のたえまのほしかとぞみる」（千載集・夏・一九五・顕季、堀河百首・照射・四二二＝第二句「さ山がみねに」）のように、空間上の「間」を含む叙景句が、別の叙景の見立てとなっているような場合である。

如上の整理を、「ひま」「いとま」についても同様に施している。この結果、全体を通覧すると、〈間〉の歌の総歌数に占める割合は、大略一から四パーセントの範囲であって、各々に有意差を認めるべきか否かは判断の分かれる数字のように思われる。

ただ、時間上の「間」と空間上の「間」の比率については、『万葉集』と三代集では時間上の「間」が多いのに対して、『後拾遺集』以降ではほぼ拮抗か空間上の「間」の方が多い場合があ

ることが注意される。また、空間上の「間」の歌の中でも、時代が下るにつれて、当然のように懸詞や序詞や比喩は減少する、といった傾向は認められよう。

さらに十三代集に限ると、『新勅撰集』と『玉葉集』『風雅集』および『新千載集』『新後拾遺集』が、空間上の「間」の方が多く、中でも、玉葉と風雅の両集は、新勅撰・新千載・新拾遺集等に比しては、懸詞・序詞・比喩の類の表現の歌が少なく、空間上の「間」を含む表現が、言わばより純粋な叙景に用いられている傾向が認められるのである。

なお、『堀河百首』は、空間上の「間」の歌の比率が高く、後拾遺から金葉へと到る勅撰集の動向に符合して、事実後述のとおり、〈間〉の歌の類型の確立にも重要な位置を占めているのである。

さらに、新古今六家集については、全て空間上の「間」の歌の数が時間上のそれを上回っているが、特に『秋篠月清集』はその比率が高い。新古今歌人中でも良経の叙景歌の特徴が、京極派にどのように近接するのか、といった点で注意するに値しよう。

以上は、統計処理上の数値に関する一つの解釈にすぎないが、一応この結果を踏まえつつ、空間上の「間」を含む歌を取り上げ、『万葉集』を併せて主に勅撰集の流れの上に考察してゆきたい。

二

まず、言うまでもなく『万葉集』では純粋な叙景歌は少ないが、〈間〉の歌についても、空間の「間」を叙景上に強く意識するも

のではない。しかしながら、次のような歌々も存するのである。

① なみまよりみゆるこしまのはまひさぎひさしくなりぬきみにあはずして（卷十一・寄物陳思・二七六三、二七五三）

② きのくにのさひかのうらにいでみればあまのとしびなみまよりみゆ（卷七・雑歌・一一一三、一一九四）

③ はるさればうのはなぐたしわがこえしいもがきまはあれにけるかも（卷十・春相聞・寄花・一九〇三、一八九九）

④ たまだれのこすのまとほしひとりあてみるしるしなきゆふづくよかも（卷七・雑歌・詠月・一〇七七、一〇七三）

⑤ くもまよりさわたるつきのおほほしくあひみしこらをみるよしもがも（卷十一・寄物陳思・二四五四、二四五〇）

⑥ あさかすみはるひのくれはこのまよりうつろふつきをいつしかまたむ（卷十・春雑歌・詠月・一八八〇、一八七六）

⑦ このまよりうつろふつきのかげをしまたちやすらふにさよふけにけり（卷十一・問答・二八三二、二八二一）

つまりは、万葉の段階で既に、「なみま」「かきま」「くもま」「このま」等の、後代に類用される詞が使用され、また④から⑦のように、簾や雲の間あるいは木々の間等の物の隙間を通して射す月光を詠むといった、後代に類型化する方法も成立している。

中でも、①は、『拾遺集』（恋四・八五六）結句「君にあはずて」や『古今六帖』（第六・ひさぎ・四三二三）結句「いもにあはずて」に採録されたこともあってか、「なみまよりみゆるこしま」の句が、例えば「ゆふさればしほかぜさむしなみまよりみゆるこじまに雪はふりつつ」（続後撰集・冬・五二〇・実朝）など

のように、後代に摂取されている。⁷また、②の浪間の漁り火の景も、後代に多く詠まれ、その意味では類型の基礎の一つとなっている。

従って、和歌に於ける叙景の要素としての空間の「間」の詞と方法は、比較的早い段階に成立していたと見做してよいように思われる。

次に、三代集には、「いはまをもわけくるたきの水をいかでちりつむ花のせきとどむらん」(拾遺集・春・六七・読人不知)や「あしまより見ゆるながらのはしはら昔のあとのしるべなりけり」(拾遺集・雑上・四六八・清正)などの、「いはま」「あしま」のような、やはり後代に継承されてゆく詞が現れている。かつは「このまよりもりくる月の影見れば心づくしの秋はきにけり」(古今集・秋上・一八四・読人不知)などは、「木の間」と「心づくし」の詞を核として、例えば、「山の端を出ても松の木の間より心づくしの有明の月」(新古今集・雑上・一五二・業清)といった歌の本歌になるなど、盛んに受容されている。これも与つてか、万葉以来の詞である「木の間」は非常に多くの作例を生んでいるのである。

しかしながら、この類の詞の側面以外には、〈間〉の歌の、後代に継承されていく表現の点では、三代集に万葉集以上の付加価値を認めることはできないように思われるのである。

さて、次の『後拾遺集』では、「杉間(の月)」(九四〇・素意)という新しい詞が登場し、また、「あけぬるかかはせのきりのたえまよりをちかた人のそでのみゆるは」(第三句「たえだえに」

の異同あり。秋上・山ざとのきりをよめる・三二四・経信母)や「むさしのをきりのたえまに見わたせばゆくすゑとほき心地こそすれ」(賀・同じ屏風(入道撰政の賀しはべりける屏風)に武蔵野のかたをかきて侍けるをよめる・四二七・兼盛)のように、「霧の絶え間」という、後代に継承される重要な措辞も見える。それ以上にここで注意すべきは、「たえまよりをちかた人の」「たえまに見わたせばゆくすゑとほき」といった、空間的な奥行きを感じさせる、後の京極派にも繋がるような表現が見られることである。しかしまた、前者はそれが「夜明け」を告げる証左という趣向の中で用いられているのであり、後者も兼家の六十賀の屏風歌として「心地こそすれ」という心情表現で長寿の祝意を述べたものであって、純然と自然空間を叙したものでなく、この点ではいわゆる王朝和歌の域を出ていないと言えるのである。

同様に、『金葉集』についても、「郭公くものたえまにもるつきのかげほのかにもなきわたるかな」(夏・月前郭公といへることよめる・一二三・皇后宮式部)には、「雲の絶え間」という後代類出の措辞が見える。同時に、それに続けて「もるつきのかげほのかにも」とあつて、これは同時代の俊頼の判詞では「あやにくにあかきもの」であるべきだと批判されたが、「ほのかにも」と、雲間の月光の繊細さを表現したところに清新さが認められ、京極派の特徴にも通うのである。ただしまたそれが、「ほのかにもなきわたるかな」と、郭公の声についての懸詞として、つまり、右の後拾遺歌の場合と同様に、修辭上の技巧的表現である点で、京極派のそれとは懸隔があるとも言えるのである。

しかしまた一方で、同集の別の一首「かぜふけばえだやすからぬこのまよりほのめく秋のゆふづくよかな」(秋・一七五・忠隆)が、「かぜふけば」の条件付けや「かな」の詞遣いは別にして、比較的純粹な自然詠として、「木のま」からの「夕づく夜」を「ほのめく」と表現していることは特に注目されるのである。

三

ところで、上記のように、「堀河百首」は空間上の「間」の歌数が比較的多いが、個々にも《間》を含んだ多様な叙景表現が見えている。例えば、次に示すときである。

①夕霧のたえまにみれば花薄ほのかに誰をまねくなるらん
(秋・薄・六三八・肥後)

②山のはを横ぎる雲のたえまより待ちいづる月のめづらしきかな
(秋・月・七八五・公実)

③難波江の草葉にすだく蜜をばあしまの舟のかがりとやみん
(夏・蜜・四六五・公実)

④五月闇雲まのほしとみえつるは鹿たづね入るともしなりけり
(夏・照射・四三〇・肥後)

まず、①のように、「夕霧のたえま」の「花薄」の様を「ほのか」の詞で表しつつも、それが、「ほのかに誰をまねくなるらん」と続いて、上句が序詞風にも働くという、技巧的表現である点は、先の金葉集歌の場合などと同様である。

また、②については、「山たかみあけはなれゆくよこぐものたえまに見ゆる峰の白雪」(新勅撰集・冬・四二三)の実朝詠や直

接これに拠ったと見られる「あけわたるとやまのみねのよこ雲のたえまよりしてかすみそめぬる」(京極為兼全歌集・弘安九年、詠立春百首和歌・六一)の為兼詠に通うものがあると考え。勿論「横雲」の語自体は、新古今時代の家隆・定家詠等からの受容だろうが、山に横様に雲がたなびく絶え間に対象を見る点では、②の公実詠を一つの先蹤として位置付けることができようか。

③、④は、草葉に群れる蛍光を葦間の舟のかがり火と見たり、鹿探索のともし火を夏の闇夜の雲間の星と見たりして、共に見立ての趣向ではあるが、暗黒中での光の明滅や点在を叙している点は、京極派に通ずるものと見做しうるのではないだろうか。

これに関連して、「久安百首」の「むらむらにさけるかきねの卯の花は木の間の月の心ちこそすれ」(夏・三二一・顯輔、千載集・一三九)と「むらむらに野べのにしきのみえつるはへだつる霧のたえまなりけり」(秋・一一四一・上西門院兵衛)についても、前者は、「木の間の月」を「むらむら」に咲く垣の卯の花の見立てとし、つまりは「木の間の月」を「むらむら」なるものと見るのである。後者が、「霧のたえま」に見える野の草花の様子を「むらむら」と表していることと併せて、空間の「間」の景を平面的にはあるが光彩の点点とした散らばりに捉えている点は、後代に展開してゆく新奇さと見てよいと考えるのである。

以上より、後拾遺・金葉集辺りを転換点として、空間上の「間」の歌の詠みぶりに、後の京極派の特質にも似通うような新しさが勅撰集に顕現してくると言え、また、堀河・久安両百首などに見られるような試みが、《間》の歌の多様化と変革に与って

いると言えるであろう。

四

さて、『新古今集』には、右に見たごとく空間の「間」の叙景歌の類型が総括的に取り込まれていると言つてよい。「秋風にたなびく雲のたえまよりめいづる月のかげのさやけさ」(秋上・四一三・顯輔、久安百首・秋・三三八Ⅱ第二句「ただよふ雲の」や「卯花のむらむらさけるかきねをば雲間の月の影かとぞ見る」(夏・卯花如月といへる心をよませ給ひける・一八〇・白河院)などもそれに他ならない。前代の特徴的な空間上の「間」の歌の典型——物の間隙からもれる光や光彩の散らばりの見立ての興趣——が、新古今集の構成歌として顕れたと言えるであろう。

一方、同集には他に、「春かせのかすみ吹きとくたえまよりみだれてなびく青柳のいと」(春上・七三・殷富門院大輔)や「しら雲のたえまになびく青柳のかづらき山に春風ぞふく」(七四・雅経。「たえまになびく」は『詠歌一体』河野本等で制詞)のように、風に繚乱する青柳を霞や雲の「絶え間」に覗望するといった伝統的趣向が見えるが、これはむしろ白景の空隙に隠顕する青緑という色彩の対照という点に清新さがあって、敢えて言えば一応は京極派の特質にも連綿してゆく要素が存しているのである。

また、「五月雨のくものたえまをながめつつまどより西に月を待つかな」(夏・二三三・荒木田氏良)などは、本来東天に待つべきが五月雨の雲に遮蔽されて望めず、西方の雲間に出る月を窓を通して待ち眺めるという趣旨である。これについては、視点が、

窓の枠組みを通して、さらに遠景の雲の絶え間の枠組みに及んでいる点で、京極派の叙景の方法に通うと捉えられるのである。⁽¹³⁾

従つて、空間上の「間」の歌についても、一般に言われるように、新古今が前代までの詠風の帰結になっていると同時に、次代の和歌、特に京極派和歌にも展開すべき詠風の萌芽の一面も見せていると諒解される。しかし大勢としては、(間)の歌に限れば、『新古今集』はむしろ王朝和歌の伝統の範囲内にあると言えよう。

五

続いて新勅撰から玉葉までを概観してみたい。まず、『新勅撰集』では、「あけぬるかこのまもりくる月かげのひかりもうすきせみのは衣」(夏・一八六・如願)や「ひさかたのみどりのそらくもまよりこゑもほのかにかへるかりがね」(春上・四九・師氏)のように、樹間を洩る月光の繊細さを「うすき」と表現しつつ、それは「せみのは衣」を導く序詞としても働かされていたり、雲間の青天の点景として見える雁を「ほのかに」と表す指向性を見せつつ、それは「声もほのかに」という並立の「も」による間接的表現で示されたりしている、といった具合に、前代までの手法にとどまっている。ただ、「さびしきはいつもながめのものなれどくもまのみねのゆきのあけぼの」(冬・四二二)の良経詠は、雲間に眺望する雪峰の曙景を寂寥の極みとして捉えている点で注目されるが、これについては後述する。

さて、岩佐美代子氏が既に御指摘のとおり、新勅撰より後、時代が下るにつれて、「後の京極派和歌を予想させるに十分」な和

歌が各勅撰集に登場する。当面の課題である空間上の「間」の歌に即して見れば、それは、例えば次のごとき歌でもであろう。

かくれぬとみればたえまにかげもりて月もしぐるむらくも

のそら（続古今集・冬・六一五・守覚法親王）

かぜはやみあまざるゆきの雲まよりこほれる月のかげぞさや

けき（続古今集・雑上・一六二・平親清女）

むらさめの雲のたえまに雁なきて夕日うつろふ秋の山のは

（続拾遺集・秋上・二七一・実伊）

ゆふだちの晴れゆくみねの木のみより人日すずしき露の玉ざ
さ（続拾遺集・夏・二〇六・後鳥羽院）

これらはいずれも空間上の意味の「間」を含んだ詞が、純粹に一首の中で叙景表現としてのみ存在している。加えてそれが、単に静止画的な表現でなく、「かくれぬとみればたえまにかげもりて」、「むらさめの雲のたえまに」「夕日うつろふ」といった、ある対象の《間》に別の対象の相対的な動きを写した表現であるところに、京極派に連結する新しさを認め得ると考えるものである。また、「伊勢のうみはるかにかすむ浪まよりあまの原なるあまのつり舟」（続拾遺集・春上・三三一・行意）などについては、遙遠の海と空が重層する霞中で舟を「浪ま」に眺望するという構図が、まさに京極派的な叙景と言えるように思うのである。

六

ここで京極派の勅撰集たる玉葉・風雅両集を見る。例えばまず、冒頭に示した「このまより」の古今歌（二八四）を本歌とする、

「秋のきてけふみか月の雲まより心づくしのかげぞほのめく」
（玉葉集・秋上・四六一・実氏）の、雲間からの月それも三日月の光を「ほのめく」と表すごとき、間隙の光線の繊細な表現は、京極派の特質であると言つてよい。「たちならぶ松の木のマにみえそめて山のはつかに月ぞほのめく」⁽¹⁵⁾（風雅集・秋中・五八三・経顕）や「時鳥さやかにをなけゆふづく夜雲まのかげはほのかなりとも」（風雅集・夏・三三〇・公陰）なども、同様の例となるが、特に公陰詠は、時鳥の声と月光の形容とを伝統的類型とは正反対に据える趣向によつて、特徴ある歌となつてゐる。

次に、例えば左に示す歌々は、前節に見たごとき対象の相対的な動きを伴う叙景の手法が明確に現れて、そこに新しさがある。

晴れゆくかただよふ雲のたえまより星見えそむるむら雨の空

（玉葉集・雑二・二一八・後鳥羽院宮内卿）

うきて行く雲まの空の夕日かげはれぬとみれば又しぐるなり

（玉葉集・冬・八四九・隆博）

うき雲にはやくちかひて行く月のはれまになればかげぞしづ

まる（玉葉集・秋下・六六六・為守）

ながむれば木のまうつろふ夕づくよややけしきだつ秋の空か

な（風雅集・夏・四五四・式子内親王）

影よわき木のまの夕日うつろひて秋すさまじき日ぐらしの声

（風雅集・秋上・四五八・俊実）

ほどもなく松よりうへになりにけり木のまもりつるゆふぐれ

の月（風雅集・秋中・五八九・尊氏）

うらの松木の間にみえてしづむ日のなごりの浪ぞしばしうつ

ろふ（風雅集・雜中・一七〇五・後二条院）

また、例えば、

むらむらに雲のわかるるたえまより暁しるきはしいでにけり

（玉葉集・雜二・二一三八・從三位為子）

朝ぼらけきりのはれまのたえだえにいくつらすぎぬあまつかりがね（風雅集・秋中・五三一・伏見院）

見わたせば雲まの日かげうつろひてむらむらかはる山のいろ

かな（風雅集・雜中・一六四八・宗尊親王）

月のゆくはれまの空はみどりにてむらむらしろき秋のうきく

も（風雅集・秋中・六〇二・為基）

むら雲のたえまたえまにほし見えてしぐれをはらふ庭のまつ

かぜ（玉葉集・冬・八四六・土御門院）

なども、同様に動きを伴った叙景であり、かつ、「むらむら」「たえだえ」などの語に支えられ、景物の散らばりや一様でない変化も表出されている。言わば、対象の散在や斑紋の形態と相対的な

動態の両要素を併せ持った歌と言える。特に、宗尊の「見わたせば」詠などは、流れる雲間を洩れる日光の変化に従う山肌の変容を叙している特徴的である。また、為基の「月のゆく」歌なども

色彩の対照が明確であって、京極派の好尚を顕示している。

これに関連して、光の明滅・明暗の対照を詠じたものとして、

「夕やみにみえぬ雲まもあらはれて時時てらすよひのいなづま」

（風雅集・秋中・五七五・為家）がある。稲妻の明滅だけでなく、その閃光によって雲の白さと絶え間の黒さがうかびあがってくる、

という趣向であらう。その稲妻の歌は、京極派に比較的多く見え

る。中では、「秋の雨のはれゆくあとの雲間よりしばしほのめく

よひのいな妻」風雅集・秋中・五七四・実名）が、「ほのめく」

の語によって雲間からわずかに名残りの稲光が閃く様が表されて

いて、一つの典型を示すと言えるようか。

七

一方、例えば、

むらくものたえまの空ににじたちてしぐれ過ぎぬるをちの山

のは（玉葉集・冬・八四七・定家）

むら時雨過ぎゆくみねの雲まより日かげうつろふ遠の山もと

（玉葉集・冬・八四三・公相）

見わたせばあけわかれ行く雲まより尾上ぞしろき雪の遠山

（玉葉集・冬・九五一・賀茂久世）

あけわたる波ぢの雲のたえまよりむらむらしろき雪の遠山

（玉葉集・冬・九六九・隆康）

浦とはくならべる松のこのまより夕日うつれる浪のをち方

（玉葉集・雜二・二〇九〇・從三位為子）

などについては、対象の散らばりや相対的な動きを示す特徴を有

しているのに加えて、空間の「間」を通しての遠景が表現されて

いる点が重要である。これは、上述した後拾遺集歌の「霧の絶え

間」の奥行き感などからの発展としても捉えられる。しかしむしろ、例えば「窓」や「軒」といった、叙景上の枠組みや定点を通

して対象を凝視しつつ空間を分節して把握するという、京極派和

歌の特質の一連として把握するべきだと考える。即ち、視点から、

「雲間」や「木の間の中間点を通して、遠景を叙すという構図であって、空間の「間」を分節点として、立体的空間が表出されていると言えるのである。

さらに、例えば、「さみだれの雲まの軒の時鳥雨にかはりて声のおちくる」(玉葉集・夏・三六九・慈円、正治初度百首・夏・六三一)第二句「雲まく軒の」、結句「こゑのもりくる」や「草がくれ虫なきそめて夕ざりのはれまの軒に月ぞみえ行く」(風雅集・秋中・五八〇・花園院一条)などは、視点から中間の枠組みである「軒」を通して、さらに上空の「雲間」や「霧の晴れ間」という枠組みあるいはもう一つの中間点を設定している。特に後者については、さらにそのむこうの月を見て、立体的空間の奥行きがより多重の分節によって表出されているのである。この類を京極派和歌の空間の把握の典型、立体的空間の叙景の具体相の一つと見做してよいと考えるものである。

ところで、先に保留した、「間」から洩れる光線や景色を寂寥なるものとして捉える詠法については、例えば、『風雅集』には、「きりぎりすおのがなく音もたえだえにかべのひまもる月ぞかなしき」(風雅集・秋中・五六一・公蔭)や「物思へとするわざならし木のまよりおちたる月にさをしかの声」¹⁷⁾(風雅集・秋上・五一九・良経、千五百番歌合・一二六二)がある。両者は、壁の空隙や木々の間隙から洩れる月光と、虫や鹿の声との融合の中に、秋の寂寥を感じるといふ趣旨である。このうちの聴覚の要素を除けば、先に見た新勅撰集の良経詠と類似した発想と言える。後者は、その良経自身の詠作であり、かつ同様の詠作は叔父の慈円に

も、「たぐひありやあはれもふかき山べに木のまの月をみる心こそ」(拾玉集・一日百首・月・九二五)と見えるのである。風雅集の公蔭詠の方がやや景が微細ではあるが、空間の「間」に対象がほの見えることを、情趣の深いものとして強調する方法に於ては、これらの歌は通底するであろう。

八

さて、玉葉集・風雅集に採録された歌、即ち一応は今言う京極派和歌としての選択を経て両集を構成する歌には、当然、当代歌人と前代歌人の作が混在している。そして、当面の課題の空間上の「間」の歌の内、それが如上の京極派的な特質を見せるものについては、その前代歌人の歌は、いわゆる新古今新風歌人達の歌が中心となっていると見てよいように思われる。

その視点で、とりあえずはいわゆる新古今の六家集歌人の歌の例をあげてみたい。例えば、西行・慈円・定家には、かげうすみ松のたえまをよりきつつ心ほそしやみかづきのそら(山家集・松のたえまより、わづかに月のかげろひて見えるをみて・一一五一)

初雪のふりすさみたる雲まよりをがむかひ有る三か月のかげ
(拾玉集・賀茂百首・冬・二二六〇)

木のまもるかきねにうすきみか月の影あらはるる夕がほの花
(拾遺愚草・後鳥羽院百首・夏・一三三三)

があり、樹間や雲間の三日月という繊細な景が既に見えている。これは、『新古今集』にも「しきしまやかまど山の雲まより光

さしそふゆみはりの月」(新古今集・秋上・雲間微月といふ事を・三八三・堀河院)と「ゆみはりの月」の形で既出してもいるが、玉葉・風雅両集には、先に示した歌の他にも、「三日月」詠として、「秋きてはけふぞ雲まにみか月のひかりまちとる萩のうは露」(同集・夏・四五三・公藤)、「山あらしに木のはふりそむら時雨はるる雲まにみか月のかげ」(同集・冬・七三七・進子内親王)、と顕現しているのである。また、両集には採録されなくとも、例えば京極派の歌合にも、「風さむみかりなきわたる夕ぐれのくもまにほそきみかづきの影」(光厳院三十六番歌合・秋雲・三一・太政大臣(公賢・女)などと詠まれているのもあった。また、「三日月」の詞から離れて見ると、右の「秋きては」の公藤歌は雲間の月光が露に宿る微細さに興趣があるのであって、その点むしろ、「ゆふだちの晴れゆくみねの木のまより入日すずしき露の玉ぞさ」(統拾遺集・夏・二〇六・後鳥羽院)などに類すると思われる。とすればまた、『正治初度百首』にも「夕立の晴るる雲間に出づる日の光にみがく浅茅生のつゆ」(夏・一八三六・静空Ⅱ実房)があり、類型の先蹤となっているのである。

九

さてまた、例えば、

冬をやみの雪げの雲のたえまよりきよくぞもるるほしの光は

(拾玉集・春日百首・冬・二六三)

うづらなくわが故郷の庭ののらに雲まの月の影ほのめきぬ

(拾玉集・建久二年、伊ろはの和歌を左將軍よみて、よめと

ありしかば・秋・四五九七)

山ふかみ木のまにまよふ月影をたえだえ袖にやどしてぞみる

(拾玉集・四七九六)

わすれ水たえまたえまのかげみればむらごにうつる萩が花ず

り(拾遺愚草・皇后宮大輔百首・秋・二二七)

よをこめてあさたつ霧のひまひまにたえだえみゆるせたの長

橋(拾遺愚草・重奉和草率百首・雑・五九〇)

といった、慈円や定家などの作は、空間の「間」が、対象を限定し条件を付加して、景をまばらに見せたりよりこまやかにしている点で、まさに京極派和歌の先蹤となるものである。特に例えば、『玉葉集』の「あられふる雲のたえまの夕附日ひかりをそへたまぞみだるる」(冬・一〇〇八・為藤)は、雲の絶え間の夕日が

霞の玉に光彩を添える趣向で、繊細な感覚の歌であるが、この手法も、例えば定家の「ふきみだる雪の雲まを行く月のあまぎる風に光そへつつ」(拾遺愚草・建仁元年十二月八日八幡歌合)月前雪・二四四九)という、雪雲の間の月が風に吹き乱れて降る雪に光彩をそえるという歌によつて既に前代に実現されているのである。加えてこれは、気象の多重の変化の中に、同時進行で雲間に天象の光を見るところという類型でもある。その点に於ても、「霧はるる雲まに月はかげ見えて猶ふりすさぶ秋のむら雨」(玉葉集・秋下・七二二・為頭)や「夜もすがら時雨すさめる村雲のたえまにきよき星ぞさむけき」(院六首歌合・冬雲・一六・藤原親行)のような京極派の和歌に直結するのである。

さらにまた、『玉葉集』の「このまよりみゆるは谷の螢かもい

さらにあまの海へゆくかも」(夏・四〇〇・喜撰)は、作者を喜撰法師とする古歌だが、上記したとき叙景句が一方の叙景の見立てとしてある詠ではない。樹間から見える光が、谷の螢かまた海へ向かう漁り火か、の区別を明確にせずに、結果としてただ暗闇に明滅する光の様のみを示しているのである。この点が恐らくは撰者あるいは京極派の好尚にかなった要因と考えるが、これについても定家に、「うかひ舟むら雨すぐるかがり火に雲まの星のかげぞあらそふ」(拾遺愚草・権大納言家三十首・雨後鵜河・二〇六五)のような作があつて、かがり火と雲間の星が競いあう様が叙されており、一方が一方の見立てとなるような古態から脱却した(間)の歌の詠法は京極派による発見以前にも試みられていたのである。

さて、その他、「はるかなるみねのくもまのこずゑまでさびしきいろのふゆはきにけり」(秋篠月清集・ふゆのはじめに・一二六八)や「風の音はいまとほ山の木の間よりめにはさやかに月ぞもりくる」(壬二集・同(仁和寺)法親王会に、初秋月・二三三四)は、雲間や樹間を枠組みとして遠景を叙しているが、これも、先述のごとく、京極派和歌の一つの大きな特徴と考えるものである。特にまた、空間の奥行きを多重に分節する方法としての、中間点の「軒」の類ともう一つの中間点の「雲間」との組み合わせについても、「軒ちかき峰の雲まをながむれば恋のうちよりいづる月かな」(正治初度百首・山家・七九〇・忠良)や「五月雨の雲間待ちいでてもる月は軒のあやめにくもるなりけり」(同百首・夏・四二九・良経)などと、『正治初度百首』での試みを挙例し

得るのである。ちなみに、「窓ちかき軒ばのみねはあけそめて谷よりのぼるあかつきの雲」(風雅集・雑中・一六三一・従三位親子)といった類歌が、『風雅集』の一首として見えてもいるのである。

十

最後に、「間」を含む語詞について少々付言しておく。例えば、『玉葉集』の永福門院の「いりあひのこゑする山の影くれて花のこのまに月出でにけり」(春下・二二三、永福門院百番自歌合・八)の「花の木の間」の措辞は、既に『続古今集』で実氏の「あかずみるはなのこのまをもるつきにおもかげとめよくものうへ人」(春下・一三三)に見えるが、元々慈円に「秋よりも霞にくもる月影のはなの木の間をもるぞさやけき」(拾玉集・秀歌百首・春・三〇七〇・三五八〇にも)や「ちりのこる花の木の間」の有明になる月のよの月を見るかな」(同集・詠暮春和歌・三八七二)の作がある。

また、同じく『玉葉集』に見える「むら雲のすぎのいほりのあれまより時雨にかはる夜はの月かけ」(冬・八五六・有家、千五百番歌合・一八五〇)歌末「月かな」の「荒れ間」の語は、「月かげは物思ふやどのあれまよりこととぶらひにもるかどぞみる」(散木奇歌集・重服に侍りけるとしの秋、月のねたりける所にもりきたりけるを見てよめる・五〇〇)や「柴の庵のねやのあれまにもる雪はわがかりそめのうはぎなりけり」(散木奇歌集・田上の山里にてふしたる所に雪のもりきたるをみてよめる・六六二)

の、俊頼の用例を原拠とするが、家隆や定家にも、「おちつゝもる軒の荒まの松のはにあやなく月の影ももりこず」(壬二集・百首 文治三年十一月・雜・松・九八七)、「まどろまでさやかに聞きつ時鳥ね屋の荒間の空や過ぐらん」(壬二集・九条前内大臣家百首・夏・古宅時鳥・一五六二)、「うつしける月のみかは光りあひて軒のあれまにつもる白雪」(拾遺愚草・文治五年十二月、後京極摂政大納言の時十首歌・古寺雪・二四六六)の用例がある。右の有家詠も併せて、新古今歌人達が俊頼歌から受容しつつ試みたものが、玉葉集に採択されたという道筋を想定し得えようか。

以上八十節を要するに、〈間〉の歌についても、京極派の和歌の特質と言える点に於て、いわゆる新古今時代に試みられ創出された方法や言詞が、しかし新古今集には実現せずに、玉葉・風雅集に到って初めて勅撰集上に顕然化したと言えるであろう。空間の「間」を一つの機能としつつ、光の明滅や繊細さを表したり、対象の散在や斑紋の様を示したり、対象に相対的な動きを付与したり、あるいは立体的・重層的に遠景を叙したりする詠風とそれを支えるべき詞が、新古今時代前後に準備されつつ、京極派の時代に到って成果として明確に顕れたと考えるのである。

むすび

空間上の「間」を詠んだ歌について考察してみた。取り上げ得なかった諸集諸歌人詠の精査、漢詩文との関連や歌題による詠法の問題の検証等、残された課題は多いが、ひとまず以上の考察を踏まえて私見を述べておく。

空間上の「間」の歌に於ける京極派歌風の特質としての要点は、大略、次のようになるうか。まず、光線の繊細さ、光の明滅や明暗、色調・色彩の対照を、〈間〉の中に捉えているということである。次に、対象の動き、即ち風景や気象の時間的な推移とも言える動態を、〈間〉との空間的相対に於て示しているということである。さらには、空間上の奥行きあるいは遠近を、〈間〉を分節点・枠組みとして多重に見据えているということである。

以上のような点が特徴と言えるが、もとよりこれらの特質は、既に諸家によつて整理されている京極派歌風の要点と重なるものである。しかし、それらが、空間の「間」の機能を利用してより先鋭的に表現されている時、その〈間〉の歌が他とは異なる京極派的な和歌として、より具体的に挙証することが容易なように思われるのである。換言すれば、京極派和歌の典型の一端を、〈間〉の歌を通じて具体的に見る事ができるのではないかと思うのである。

そして、如上の特質はすべて、対象を凝視して対象があるがままに叙するということに集約されるとも考えるのである。つまりは歌の視線のありようの問題を追究する一環として、〈間〉の歌を考察することによって、京極派の対象把握の方法の一端を闡明し得ると思うものである。

また、和歌の史的展開の観点から言えば、以上のような特徴の成立については、大枠として、まず〈間〉の歌の基本的な詠作方法が三代集までに確立し、それを受けて後拾遺集から千載集にかけて堀河百首などの試みも併せて京極派の特徴にも通うような比

較的新しい詞や方法も登場し、それらが新古今集に総合的に表れていると言える。その後、新古今時代を経て新勅撰以降に於ても京極派の特質に直結する一面を見せつつ、玉葉・風雅兩集でそれが明確に顕現した、と整理してよいであろう。従つてまた、その特質は、前稿の〈軒〉の場合と同様、既に新古今時代に萌芽しながら、しかし新古今集には開花せず、時を経て京極派の選択を得て京極派の歌風として結実した一つの具体例であるとも考えるものである。

注

- (1) 「京極派和歌の一面覚書——〈軒〉をとおして——」〔徳島大学国語国文学〕五、平四・三三。
- (2) 他にも、古今集・四七九や拾遺集・七四六等。
- (3) 他に、千載集・一三九（久安百首・三二二・顕輔）等。
- (4) 初句「浪間従」の現行の訓は「なみのまゆ」。
- (5) 結句「浪間従所見」の現行の訓は「なみのまゆみゆ」。
- (6) 第二句「小廉之間通」の現行の訓は「すのまとほし」。
- (7) 他にも、「浪まに見えし淡路島山」（新古今集・六）や「浪間よりみゆる小島」（同集・六四五）等。
- (8) 他にも、壬二集・一七六六や続古今集・五一〇等。
- (9) 御稲田利徳氏「落ちたる月の影」考——清輔本「古今集」の享受——（『源氏物語の内と外』昭六二・一一、風間書房）参照。
- (10) 『永縁奈良房歌合』郭公七番右（勝）。「……右歌、くものたえまにもの月、は、あやにくにあかきものとこそ見たまふれ、なほ、かげは

のかに、といはば、つきにくもをやかくべからん、そこぞおぼつかなき、もし証歌あらばよきうたなり、しばしにてもかつとぞまうすべき」。

- (11) 「大井川せぜにひまなきかがり火とみゆるはすだく蛩なりけり」（夏・蛩・四六九・顕季）という類歌もある。
- (12) 岩佐美代子『京極派和歌の研究』（昭六二・一〇、笠間書院）附編。
- (13) 注（一）所掲拙稿を御参照いただければ幸甚である。
- (14) 注（12）所掲書第一編序章四―五頁。
- (15) 「しぐれふる山のはつかの雲まよりあまりて出づるありあけの月」（玉葉集・冬・九一〇・為家）に拠るか。
- (16) 『歌苑連署事書』面々所詠並詞以下事「虹のことにや。前代の勅撰いまだ見えざれども、げにこれは珍しくあるべきことこそおぼれ。（日本歌学大系本）。『標峯緑虹外 置嶺白雲間』（文選・卷二十七・早発定山・沈休文）。
- (17) 注（9）所掲稲田氏論攷参照。
- (18) 「正治初度百首」にも「村雲のたえまの月に雁鳴きて萩の葉そよく有明の空」（秋・一七五三・生蓮Ⅱ師光）の例が見える。
- (19) なお、「三日月」の歌については、例えば、「風のおとははげしくわたる梢よりむら雲さむき三日月のかげ」（玉葉集・冬・九〇九・永福門院）のように、「間」の語を含まなくとも、それ自体で、前後代の和歌とは異なる京極派的な詠風を形成してもおり、後考を期したい。
- (20) 本文「触石春雲生枕上 銜嶺曉月出窓中」（和漢朗詠集・山家・五六二・直幹）。
- (21) 漢詩文表現との関連については、調査が不十分で今後の考察を期す

るしかないが、例えば、『類聚名義抄』では、「ま」の訓はやはり「間（間）」の字にあてられているが、その点では、

- ①丹霞映明月 華星出雲間（文選・卷二十一・芙蓉池作・魏文帝）
- ②寄書雲間雁 為我西北飛（文選・卷二十六・贈張徐州稷・范彦龍）
- ③標峯綵虹外 置嶺白雲間（文選・卷二十七・早發定山・沈休文）
- ④秋蟬鳴樹間 玄鳥逝安適（文選・卷二十九・古詩）

⑤明明雲間月 灼灼葉中花（文選・卷三十・擬古詩・陶淵明）

のように、『文選』には、「雲」の「間」の景物を表す詩句が見えている。雲間に対象を望む趣向は、最初に記したとおり和歌でも早い段階から詠まれており、詩一般に共通するものとも解されようが、微細な表現に関わる直接の影響関係は措くとしても、やはりこういった漢詩句からの影響は一応は想定されよう。またその他、

⑥風起竹間螢影亂 月明江上笛聲多（千載佳句・天象部・風月・二七四・道彦・秋夜旅泊）

⑦清唳數声松下鶴 寒光一点竹間灯（和漢朗詠集・鶴・四四六・白氏文集・在家出家）

のように、「竹」の間の、螢や灯の光という表現が見えている。これのみからは和歌表現への直接の関連は希薄なようにも思われるが、しかしより一般的に、薄暗い物の間隙にちらちらとする光を見る趣向としては、これまで見てきた和歌の表現にも通う趣がある。

(22) 歌題では、例えば、「松間」の「梅花」「花」「桜花」「夕花」「鶯」「月」「夜月」「紅葉」「鶯紅」「雪」や、あるいは「雲間」の「花」「郭公」「初雁」「月」「待月」「微月」「明月」などがある。これらの題の制約の下で、むしろ当然に空間上の「間」の詞自体は含まない

場合も多い訳だが、様々な「間」を表現した歌が生み出されており、この視点からの追究も必要だと思われる。

- (21) 福田秀一氏『中世和歌史の研究』（昭四七・三、角川書店）第七章の「京極派歌風の要点」の節、糸賀きみ江氏『中世の抒情』（昭五四・三、笠間書院）の「玉葉和歌集における新古今歌人の位置」「風雅和歌集の新古今歌人」の章、注（12）所掲書の「緒言」等。

*和歌の本文は新編国歌大観本による。万葉集は同書所収の西本願寺本による訓に従う。

*文選は藝文印書館刊本、千載佳句は『平安時代文学と白氏文集』所収本、和漢朗詠集は日本古典集成成本により、通行の字体に改める。

〔付記〕本稿は、平成五年七月二十五日の中四国中世文学研究会第三十八回例会に於ける「絶え間の歌について」と題した口頭発表を基にしている。御教示下さった会員諸氏に厚く御礼申し上げる。

（ながわ・ひろお 総合科学部助教授）